

史料翻刻

木下鞆村日記 (二)

島 善 高

〔上表紙 別筆〕

一八四二年
天保十二年二月廿二日
同十月卅日
日記
二 木下宇太郎

〔中表紙 自筆〕

式番

天保十二年二月廿二日
同十月卅日迄
日記
木下宇太郎

天保十二年二月廿二日 晴

一、御稽古事、今日今御平常之通被遊候二付、出方仕候様御附役今
申来、今日孟子浩然之章被遊 御濟候

一、晴陽楼御詩會、御題手前今上申候、三首為被遊 御作候

春江月夜

春日書懷

一、夜分、呉越軍談被為遊 御讀候

廿三日

一、遠山三右衛門江講積被 仰付候

一、夜分、蒙求 御會

一、西洋船寧波表江騷候一件、唐人ども長崎ニ而申出候趣之書付、譯候様被 仰付置候間、今晚差上申候

廿四日 小雨、寒

今日、御装束ニ而上野御參詣被為在候ニ付、昼夜御讀書向御休ミ

廿五日 同

今日、御登城

一、近思録会業、芳澤宅

一、先月廿五日御国被差立御飛脚着、家書平安、高橋弥四郎、萩原

和次郎二男丹之允を養子ニ内約仕候由、中村加善御雇ニ而五人持^{〔扶力〕}持被下置、訓導助勤被仰付、吉田軍助御擬作高百石御知行取

格被 仰付、澤村太兵衛方白金詰御用人被仰付、其跡ハ荒木萬藏御奉行副役被 仰付、浅井廉次閏正月十一日自傷ニ而果候由、村

上傳四郎御物頭列ニ而御裏御附被 仰付候段申来候

北野寛助、際左衛門と改名仕候

荻角兵衛為替之手紙御勘定今届来候間、藤島又八江差越、金子

受取方相頼申候

柏木文雄、勝見跡相続被仰付、直二居寮熟長被 仰付置候

註

① 萩原和次郎：百石。（『熊本藩侍帳集成』）

② 中村加善：中村恕齋（一八〇四～一八七〇）。字は誠卿、通称は加善、後に庄右衛門、号は恕齋。肥後熊本藩士。文化十一年藩校時習館に学ぶ。文政五年居寮生となり、同十一年には時習館講堂世話役となり、天保十二年には訓導助勤となる。嘉永元年には御物頭列、訓導本役となった。嘉永三年阿蘇南郷御郡代となり、その後、諸郡代を歴任する。明治元年御留守居御番方組脇、御穿鑿頭となり、同三年四等官同列となる。同年十二月二十四日没す。（『恕齋日録』刊行会編『肥後中村恕齋日録』第一卷、熊本出版文化会館、平成十四年九月）

③ 吉田軍助：百石。御次御物頭列。（『熊本藩侍帳集成』）

④ 澤村太兵衛：名は正常、太兵衛と称す。四百石、郡代、目付、穿鑿頭、奉行職、世子伝を勤める。弘化三年没す。享年六十七。（『肥後人名辞書』）

⑤ 荒木萬藏：満藏、万藏。松下清蔵組、御擬作取、百石。玉名御郡代、山本山鹿助勤兼。（『熊本藩侍帳集成』、四三九、四六七頁）

⑥ 柏木文雄：柏木後洞か。名は義質、文右衛門と称し、後洞と号す。時習館助教、奉行副役、鉄炮頭等を勤め、祿百石。明治元年六月八日没す。享年五十六。（『肥後人名辞書』）

廿六日 陰

一、沼川敬内看病下仕、明日出立之由申越

一、講釈例之通、率百官如帝之始ニ至ル

一、御軍書、引續孟子御讀

廿七日 晴

一、御會、至不忍人之心章 木村少三郎来ル

一、明朝 御登城ニ付、今晚例之通御休会

一、去ル十六日立之雇着、家書平安

沼川敬内看病下り送り

廿八日 陰

一、御飛脚立ニ付諸封仕出

一、荻角兵衛分頼ミ之稿本、今度水津名當ニ而仕出

一、同人為替金御勘定物書藤島又八江懸合候處、此節便ニ申參候間、受取方之手数可仕段、戸田仁兵衛分頼ミ来候分も同様之由御坐候

一、毎月朔日、廿一日、十日、廿日、卅日、木村次郎太郎方頼ニ依而論語會可仕段、小坂九郎助方江約諾仕候、尤右會高田順助、芦田七藏杯出方致度由、是も支不申候由申向候事

註

① 水津：水津熊太郎か。名は芳徳、通称熊太郎。百石。奉行所根取。慶応二年一月に没す。享年六十五。(『肥後人名辞書』)

② 小坂九郎助：御留守居兼帯。千石。(土籍以上御礼之次第并名前知行高)『熊本藩侍帳集成』、三三四頁)

廿九日 朝風雨、夕晴

一、於御小屋、村上同様灸治仕候、七ツ後詩会、加々山方ニ而相勤

三月朔日 晴

一、若殿様 御登城

一、言行録会讀之儀、一日、十六日、廿一日ニ申談度段、清成方噂之事

一、木村次郎太郎列論語會、今日分相始、六日、十日、廿日、廿六日定日と仕候事

去ル二月八日御国被差立候御飛脚着、家書相達、平安、町野玄肅方老祖母二月四日病死之由申来候

註

① 町野玄肅：名は世徳、字は元輝、玄肅と称し、鳳陽または風来山樵と号す。再春館の師役となり、また侍医となる。触役触十五石五人扶持、本道。慶応二年二月に没す。享年七十一。(『肥後人名辞書』、『熊本藩侍帳集成』、四三三頁)

二日 雨、昼九ツ過地震、夕方雨晴

一、御會 孟子子路告以過章迄

一、晴陽楼 御詩會、御題加々山上ル、晴陽楼、春望、三日宴、三首被為遊 御出来候

三日 佳節、晴

今日佳節ニ候得共、御儀式無之、御用人江謁奉伺御機嫌候事

四日 晴

御灸治被遊ニ付昼御休会、夜分孟子被遊、御會、王使人問疾醫来節

迄相濟

五日 朝陰、微雨

御會、前章終り二至

夜分清成方論語會

六日 晴

一、講釈、例之通、大禹謨相濟

七日 雨

今日

若殿様 御登城二付御休会、尤昨夜御夜讀も御同様之事

一、岩崎二郎助休息出立

八日 小雨

一、御會 蜺龍ノ章迄

一、御夜讀 吳越軍談

九日 陰雨

一、浅井廉次頼二付、山城屋分取入置候書物之内、右文故事、撰戦

実録ハ学校江御買上申談置候と申紙面参り候二付、右二部ハ廉次

紙面を村上久太郎江相頼、此節休息之御御国許打合せ可申筈、外

二ハ逸史ハ野村傳左衛門方江買取、三朝逸事、求是編ハ書肆江差

返シ、古本大学講義ハ手元ニ取置可申筈ニ而、昨日政吉呼及相談

候處、無割ニ而受取可申段申出候間、御国江懸合之ニ部萬一取入

二成不申、指返申ニ至り候ハ、是非割を加受取候様申聞置候事

註

① 逸史：徳川家康の一生を記した伝記。十二卷、首一卷、計十三

卷。著者は中井竹山。明和七年に草稿ができたが、改稿するこ

と五度、天明年間に完成し、寛政十一年に幕府に献上した。版

本は、寛政十一年版、天保十三年版、嘉永元年版がある。〔国

史大辞典〕

十日

一、御會、沈同問ノ章ニ至ル

一、御夜讀、吳越軍談

一、夕方、論語會仕候事

一、明十一日御飛脚立ニ付平安を報具、町野玄肅江吊儀、中村加

善、村上傳四郎欲状仕出ス

十一日 晴

一、御會、龍断ノ章終

一、午後文會、安井仲平、東良助、田中亮蔵来ル、良助ハ薩州柅城

之儒臣之由、後會ハ古賀大一郎江参可申約束

一、岡永嘉右衛門御供下仕候ニ付出席無之、四百二十五卷舎記、名

撰婦納説、送岡永序、右後會課題

註

① 東良助（一八〇五—一八五八）：享和三年正月、薩州柅城（現

在の鹿児島県始良市加治木)の地に生まれた。名は秀梢、略して梢ともいった。字は千尺、号は陶園、通称を良助とした。父は東秀貞といい、後に伯父の儒医東秀壽の養子となった。加治木の郷校毓英館において秋岡冬日に学び、冬日没後墓表を撰するなど親交を結ぶ。生涯子弟の教育に従事し、安政五年八月に没す。(郷賢創立百五十周年記念会編『郷賢沿革及先賢事蹟』加治木町、昭和八年十二月)

十二日 晴

一、御會、士誠小人也二至

一、御詩會、御題暮春野游、春日溪谷、手前今上ル、今日ハ御廣庭

二而被遊候事

一、御飛脚明日ニ差延候二付、

家尊奉祝之寿詞相認、小太郎江遣ス

註

① 小太郎：木下小太郎(一八二四～一八九七)。鞆村の弟で、後の時習館訓導、木下梅里。父衛門の三男として文政七年七月十二日に生まれた。通称は小太郎、後に真弘と改め梅里は号である。幼少は洪江沼灘に句読を受け、時習館においては近藤淡泉に学ぶ。弘化三年に郷里の菊池郡の読書師となる。明治元年四月には時習館の訓導を勤め、翌五年には教部省、翌年正院に勤める。明治十五年には鞆村塾における後輩の竹添進一郎とともに外務官僚としてその任にあたった。明治三十年に没す。(木下真弘著、宮地正人校注『維新旧幕比較論』岩波書店、一九九三年、三〇八頁等)

十三日 晴、暖

一、川北喜右衛門を尋、帰り懸川西江参候

一、明日 御登城二付、御夜會御見合被 仰出候事

註

① 川北喜右衛門(一七九四～一八五三)：名は重熹、字は義卿、号は温山・春風楼、通称は喜右衛門。江戸後期の漢学者で島原藩士。初め藩儒岩瀬華沼に師事し、また古賀侗庵について学ぶ。やがて参政に累進し、天保五年、藩校稽古館が拡張再建されると教授となり、藩士子弟を教育した。嘉永六年一月八日没す。(『江戸文人辞典』)

十四日 雨天

一、御登城 御帰殿之上、臨時 御會被 仰出、孟子藤文公首章二

至

十五日 雨

一、近思録會、手前二而仕候

一、論語會罷出候

十六日 陰

一、講釈例之通、皋陶謨天工人其代之二至

一、御夜讀

十七日 雨

一、孟子御會、雨我公田之節二至

一、御夜會

十八日 陰

一、御會、井地之章終

一、御夜讀

十九日 晴

一、朝飯後司馬藤太郎江尋、松浦藩清水雅之助會面

廿日 晴

一、御不例二付 御會御延引

一、御夜讀も右同断

廿一日 晴

一、御會、御夜讀等 御不例二付暫御休ミ、御袖迄被記不申候

一、夜分、言行録會、辛川御小屋ニ而相始、朔日之夜、九日、廿一

日之夜定日ニ而、御附中御小屋廻り持之事

一、吉田潤之助方今日着之由

註

① 吉田潤之助：吉田閨之助か。御用人、三百五十石。（熊本藩侍帳集成、五七五頁）

廿二日 晴

一、村上久太郎休息前二付、高田十兵衛、長沼十郎助同道、山口至、離杯ニ出浮

一、永田内藏次方着

註

① 永田内藏次：新知百五十石。二丸御座敷御番。（熊本藩侍帳集成、四六三、五八四頁）

廿三日 雨

一、先月廿六日立之飛脚着、平安、横井儀右衛門、穂田左一郎、渡部十左衛門書状来ル、池松大八学校附物書被成候為知參ル、明石常次書状来ル

一、今日新御屋形御附御目附内藤尉右衛門着仕候

註

① 横井儀右衛門：旧知百五十石。（熊本藩侍帳集成、四六一頁）

② 渡部十左衛門：渡辺十左衛門か。旧知二百石。（熊本藩侍帳集成、四六〇頁）

② 内藤尉右衛門：百石。御近習御目附。（熊本藩侍帳集成、四六三、五七八頁）

廿四日 雨

一、御小姓組吉村直助、加来宇治右衛門着、宇治右衛門方久野熊太書状届ケニ相成、久野甚之允、閏正月五日病死之段為知ニ相成候

註

- ① 吉村直助：新知百五十石。〔熊本藩侍帳集成〕、四六一頁）
 ② 加来宇治右衛門：百石。〔熊本藩侍帳集成〕、五五〇頁）
 ③ 久野甚之允：三百石。〔熊本藩侍帳集成〕、五四六頁）

廿五日 小雨

近思録會、遠山宅

廿六日 晴

朝飯過分外出、木挽町伊藤長左衛門、龍ノ口後藤善左衛門、大槻彈藏、吉田潤之助、永田内藏次方、大里隼之助各御小屋江罷越、其分松平肥後守様、和田藏下御屋敷江罷越、橋爪助次郎酬訪仕申候、西游後初而逢申候、帰路晚暮二入岡永嘉右衛門尋、引取申候

註

- ① 後藤善左衛門：御刑法御奉行触、御穿撃役。旧知百五十石。〔熊本藩侍帳集成〕、四三四、四六六頁）
 ② 大槻彈藏：新知二百石。〔熊本藩侍帳集成〕、四五九頁）
 ③ 吉田潤之助：吉田順之助か。新知三百石。〔熊本藩侍帳集成〕、四六一頁）
 ④ 松平肥後守：松平容敬（一八〇四〜一八五二）。江戸時代後期の大名。松平容住の三男（実は水戸藩主徳川治保の次男義和の子）。松平容衆の養子となり、文政五年陸奥会津藩藩主松平（保科）家八代。藩政改革と民政につくし、軍備をととのえて房総の警備にあたった。嘉永五年二月十日死去。享年五十。初名は容和。〔日本人名大辞典〕
 ⑤ 橋爪助次郎（一八〇四〜一八八〇）：会津藩士。名は靖、号は晒齋。江戸に上り昌平覺にて学を修め、帰国して儒者見習、藩主の侍講となる。戊辰戦争で軍事目付として策を献じて活躍す

る。戦後は斗南に移るも、数年にして会津に帰り子弟を教育した。〔幕末維新人名辞典〕

廿七日 晴

- 一、昨日論語會、今夜二延申事
 一、吉村直助着、欲二参申候

廿八日 晴

- 一、横井平四郎懸合一件、小堀分村上江申越候趣二付、是方分村上
 方江内話仕候儀有之、書面二而いたし遣申候
 一、片山喜三郎来ル、御作事所林庄次郎着二付、井上久助書状相届ル

註

- ① 横井平四郎（一八〇九〜一八六九）：幕末の儒学者・政治思想家。通称平四郎、諱時存、号小楠。藩校時習館の居寮長を経て天保十年江戸に遊学したが、翌年酒失によって帰国禁足の処分を受けた。安政五年福井藩主松平慶永から賓師として招かれて越前藩政を指導した。維新政権が成立すると明治元年京都に呼ばれてまず三職制の参与、ついで議政官上局を構成する参与に就任した。翌二年正月五日に暗殺された。享年六十一。〔国史大辞典〕
 ② 片山喜三郎：名は介、字は介夫、通称は喜三郎。晩年、八十と改める。豊嶼と号する。時習館教授、高瀬町奉行を勤める。二百五十石。明治五年七月五日没する。享年五十八。〔肥後人名辞書〕

③ 政記：『日本政記』か。神武天皇から後陽成天皇までの編年体の歴史。文体は漢文。十六卷。頼山陽著。弘化二年（天保九年序）に拙修齋木活本、文久元年にいわゆる頼氏正本が出たが、両者には字句の異同が多い。幕末までの約二十年間に、少なくとも異版四種、明治以後、活版は別として木版四種が出ている。（『国史大辞典』）

④ 通議：江戸時代後期の漢文体の政論書。頼山陽著。三卷。本書は文化三年に成った前著『新策』六卷を刪正し練りあげたもので、天保元年に二十七篇ができ、さらに同三年死の直前に一篇が追加執筆された。初刊は天保十年以前で、『拙修齋叢書』に収められた。（『国史大辞典』）

廿九日 陰

卅日 雨

一、今日御飛脚立二付諸状仕出

一、作左衛門々家書届来ル、小田守敬、城野弥三次、木下新右衛門書状共々

一、夕方論語會

註

① 木下新右衛門：韃村から廻ること三代、木下甚右衛門入道美智の弟で木下文右衛門の三代目にあたる。父は木下勘右衛門、後に新之丞と改める。韃村の従兄弟。

四月朔日 雨

一、村上久太郎休息出立、新宿迄送り、高田十兵衛、長沼十郎助、国友式衛門同道

一、夜分中村健助方二而言行録會

註

① 中村健助：百五十石。（『熊本藩侍帳集成』、五五八頁）

二日 晴

三日 晴

岡永嘉右衛門、野崎平八を尋

四日 晴

辛川弾之丞列同道、巴越、中延本門寺方角出浮

註

① 巴越：戸越。戸越村は、現在の品川区戸越一―四丁目・豊町一―二丁目・平塚一―三丁目・荏原一―三丁目・小山一―三丁目・小山台一―二丁目・西品川一丁目。（『日本歴史地名大系』）

② 中延：中延村は、現在の品川区中延一―六丁目・東中延一―二丁目・西中延一―三丁目・旗の台一―六丁目・戸越五―六丁目・荏原四丁目・同六丁目・二葉四丁目。（『日本歴史地名大系』）

③ 本門寺：東京都大田区池上一丁目にある。日蓮宗大本山。山号は長栄山、大國院と号す。近世中期には徳川吉宗の室寛徳院と側室本徳院の廟所に指定された。院家照栄院に南谷檀林が設置され僧侶の学習機関となった。（『国史大辞典』）

五日 晴

一、近思録、芳澤宅二而勤

一、今晚、清成方論語會休ミ

一、若殿様御不例、御風氣ハ被為在御快候處、少々御腫氣被為有候
由二而、今日多氣安寂老御迎

註

① 多氣安寂：多紀安叔か。多紀安叔は、元簡の五男、名は元堅、号は亦柔、菫庭、通称は安叔。天保六年に奥語医師となる。(森潤三郎『多紀氏の事蹟』日本医師学会、昭和八年)

六日 晴

先月六日立之御飛脚着、謙児二月廿八日比合相煩、三月二日果申候
段申来ル

一、夕方、會業相断

七日 同

一、松原傳左衛門、高田十兵衛同道、御門外

一、三月廿日立之御雇、一昨日夜着、家書参る

註

① 松原傳左衛門：御擬作百石。(『熊本藩侍帳集成』、四六六頁)

八日 晴

一、本田猪作、中嶋朝之助同道、新富士当り歩行、晩暮帰邸

註

① 新富士：富士山になぞらえて、神社の境内などにつくられた築山の称。江戸、本郷駒込の浅間社のものが古く、江戸の各所につくられたが、安永年間に完成した戸塚の高田稻荷社の境内のものが著名。(『日本国語大辞典』)

九日 晴

一、高田十兵衛方二而碁

一、晩、言行録、入江傳左衛門方御小屋

十日 朝陰、夕雨

一、芳澤金吾、奥田悦次郎同道、御殿山当り歩行、帰り候上、堀内

久左衛門御小屋江参り、棋戦申候

一、明日之御飛脚、来ル十三日二被差延候

註

① 御殿山：東京都品川区北品川の台地。吉野桜が移され、桜の名所となった。かつては品川沖に面し、この山土でお台場が築かれた。(『日本国語大辞典』)

② 堀内久左衛門：二百石、御郡代当分。(『熊本藩侍帳集成』、五七九頁)

十一日 雨

一、文社、古賀大一郎江参ル、安井仲平、東良助、田中龍藏、税田

何某、川西三助、後会ハ東良助受持

送川西三助序 読史可法傳

十二日

十三日 御飛脚立

十四日 晴

高橋弥四郎、品川被差付候段申来候二付、益田市之允同道内迎

十五日 晴
弥四郎の家書届来ル

十六日 晴
龍ノ口江参リ

十七日 同
松原傳左衛門出立ニ付書状頼ミ

十八日
十九日

廿日
廿一日 晴
大里角左衛門病死、隼之助之知せ来ル

註
① 大里角左衛門：旧知二百石。鮑田託麻御郡代、上益城助勤兼帯。
〔熊本藩侍帳集成〕、四三五、四九九頁

廿二日 晴
大里氏江吊儀へ参候處、隼之助途中ニ而行合、少林院江墓参之由、
引返し、薩摩田町御蔵屋敷東良助を尋

註
① 少林院：熊本藩菩提寺の東海寺内にある。現在の東京都品川区
北品川三丁目付近。

② 田町：現在の東京都港区芝二・三・五丁目付近か。薩摩藩邸が
あつた。

廿三日
廿四日 雨
廿五日 雨

平野三郎兵衛、堀内久左衛門、田中弥兵衛休息出立
岡永嘉右衛門参り、有馬上総介様御内話申聞候ニ付、清成方江噂仕
候

嘉右衛門同道酒楼江罷越、離杯仕候

註
① 平野三郎兵衛：平野三郎平か。旧知、二十人扶持。〔熊本藩侍
帳集成〕、四七〇頁
② 田中弥兵衛：田中屋兵衛か。新知百石。〔熊本藩侍帳集成〕、四
六二頁

廿六日 雨
御飛脚着ニ而家書届来ル、夕方論語会

廿七日 雨
一、先般有馬上総介様分岡永嘉右衛門を以御内々被仰越候儀ニ付、
今日清成方指揮ニ而嘉右衛門方江罷越申候
一、御隣領球磨百姓騒動ニ付而、古城太郎左衛門方分外聞之書附
写、入江方江差越ニ相成、右為見ニ成候間、御覽ニも可相成哉と

奉存、清成方江差出申候

註

① 球磨百姓騒動：肥後国人吉藩領天保十二年一揆。天保十二年二月九日に上求磨地域から起り、一万五千〜三万人の群勢が鉄砲・斧・鷹口を携え、専売制に荷担する城下町商人を三十軒ほど打ちこわし、十二日夕方には解散した。茸山師を藩が雇って椎茸山を仕立てるなどの殖産政策に反対したところから茸山騒動と呼ばれる。(『国史大辞典』)

廿八日 晴

一、今日、御飛脚立二付、朝之内状仕出

廿九日 晴

一、遠山三左衛門野屋敷ニ而詩會仕候二付、芳澤金吾、加々山権内同道、暮過帰り

一、今日、澤村太兵衛方着ニ相成候

五月朔日 雨

二日 雨

三日 午後晴

龍ノ口御屋敷江参り申候

四日 晴

友之丞様、先月十七日被為

御死去候段御到来有之、右二付日数五日諸事穩便ニ可相心得旨、夜

前御達ニ相成申候

一、東良助来ル

五日 晴

太守様神奈川兮 御着、當御屋敷江被為入候二付、麻上下着、並居、御礼申上候

六日 晴

七日 晴

今日文會東良助受持ニて、洲崎弁天之側於料理屋、相勤候二付、甲藏参候間、同道罷越、人数左之通

東良助、安井仲平、古賀大一郎、川西三助、税田——、岡永嘉右衛門、塩谷甲藏、橋口彦助、彦助ハ薩州勤番ニて高輪御屋敷ニ詰居申候
後題

畊讀堂記 海防策 送良助序

註

① 洲崎弁天：品川歩行新宿二・三丁目〜狛師町付近か。現在の東京都品川区北品川一丁目〜東品川一丁目付近。当時、狛師町の俗称は洲崎といい、弁才天があった。

八日 小雨

龍口江参り、新着之面々打回り、木挽町同様、夜遅ク罷帰申候

九日 晴

尾藤健之助、川喜多助三郎、金森七郎衛門、名和桂之助来ル

註

① 尾藤健之助：百五十石、御近習御次着座。〔熊本藩侍帳集成〕、五七五頁）

② 川喜多助三郎：河喜多助三郎か。百石、御郡代拾挺頭上座御作事頭。〔熊本藩侍帳集成〕、五七六頁）

③ 名和桂之助：名は真民、桂之助と称す。学を好み書・詩文をよくする。中小姓となり藩校の文学となる。晩年職を辞して飽田において教授する。文久三年十一月十五日没す。享年八十一。〔肥後人名辞書〕

十日 小雨

川喜多治部右衛門方休息二而、今朝出立被致、岐曾路之御門迄送り申候

一、昨日、橋口、良助今詩を遣候間、一絶相認遣申候

一、昨夕、御飛脚着二而、家書平安

註

① 川喜多治部右衛門：河喜多治部右衛門か。御側御鉄砲十五挺頭、御中老支配。旧知六百五十石。〔熊本藩侍帳集成〕、四二四、四六〇、五四四頁）

十一日 小雨

十二日 同

渡部魯助来ル

十三日 同

辰ノ口上使之御物書

上使御入来、謁

十四日 雨

御不例已来未夕御詩題をも上ケ不申候處、先課之御作、此節加々山権内江批點被 仰付候、其上 御廣庭に御出之節ハ、御吟句被為在候而、随分御楽ニ相成可申、此次之御題ハ直ニ差上候而ハ如何之儀、権内江相談仕候處、可宜見込ニ付、其儘相認、権内出勤仕候ニ付相渡申處、辛川心付之儀有之、一應清成ニても噂仕候様被申聞候由ニ付、権内手元ハ八十郎方江打合候處、同役中其外御医師御奥迄も篤ト及示談、何方も支之見込無之、差出候而可宜との事之由、昨日権内今相傳候處、今日御門外可仕筈ニ付何ニ罷出、権内江相尋申候へハ、未夕出シ不申由如何之事ニ候哉と申候へハ、未夕 御沙汰も無之所ニ少しあたり居候段申聞候ニ付、御沙汰を可待訊ニ而ハ無御坐候、私今直ニ出可申と題受取、其趣相述、辛川手元江差出申候へハ、直ニ 召候而、早速御案被遊候、右ニ付而ハ御医師杯内輪談合候事も有之候

湊川謁楠公墓下 七絶
五律

尤此節ハ一題ニシテ、小序之訳文を相濟、御日限無之に奉願候事夕方、福田次左衛門離杯とて、高田、長沼等同道、七軒之酒樓江参り候、近日肩腕微痛、深水江見せ候へハ菓を服せ、灸治杯いたし候事

註

① 福田次左衛門：住江次郎右衛門組、二百石。〔熊本藩侍帳集成〕、四四一頁)

十五日

御禮 御登城被為濟候ニ付謁

一、遠山三右衛門指支候ニ付、近思録會休ミ

一、夜分、論語、例之通

十六日 雨

午時、安井仲平、東良助為慰鬱來ル、同道七軒石田屋江参り、暮比

夕川西江同伴、尚岡永江参り夜分四ツ比帰候

十七日 雨少晴

岡永嘉右衛門來ル

十八日 晴暑

十九日 同

物干作事

七ツ時分夕芳澤宅江参り、詩會仕候

廿日 同

論語会例之通、東良助來ル

廿一日 同

国友式衛門と左傳を讀始

言行録例之通、尤中村健助御小屋にて相勤

廿二日 晴

長岡佐渡殿、今日品川夕着ニ付麻上下着、飲ニ出候事

註

① 長岡佐渡：御藏米千石（隠居料外百八十石）。三万石。〔熊本藩侍帳集成〕、五七一、五七五頁)

廿三日 晴

昼後、渡部直之允來ル、物干夜分ニ至、客來、不行、去ル六日之御

雇着、家書平安

廿四日 晴

東良助來ル、同伴、橋口彦助を尋

廿五日 夕雷雨

近思録芳澤宅、雷雨ニ付、遠山、田代出殿仕候ニ付、半途ニ而休ミ

廿六日 昼晴、夜微雨

大里隼之助今頼二付、御書信所ニ而朝鮮館を取、佐藤江指遣申候

廿七日 晴

廿八日 晴

岡永嘉右衛門文社旁、離杯仕候ニ付舟行を企、人数古賀大一郎、安井仲平、川西三助、渡部魯助、税田庄藏、竹井清五人、岡永嘉右衛門、東良助、自身都合九人、金杉分乗、両国橋邊逍遙仕候處、今日川開キニ而、夜分火枝見物舟多キ中ニ而、夜六ツ半時分橋下三町計下モ、江中ニ而舟を乗沈メ、皆々隣船江飛乗、船中之諸道具皆々沈没ル、大小も同前、其中東、川西大小、仲平脇差ハ探り取り、其餘ハ知不申候付、舟館取崩ニ而、永代上ミニ着ケ、直ニ昆太仲言江参り、道具之用意を頼、東、岡永、自身三人ハ直ニ金杉江立寄、探之方相頼引取申候、八ツ時分ニ成申候

廿九日 晴

数日来暑氣殊ニ甚し、嘉右衛門、良助参る、今日江中ニ而魯助大、大一郎刀ハ網ニ而探り出申候

六月朔 晴

今日も江中探候由之處、一本も無之由嘉右衛門分申越候、高橋弥四郎来ル、昨日北川藤作江内々道具覆没之儀噂仕、暫指替を借申候而、今日国友江相談、道具等覚仕候

初二日 晴

江中之一件清成方江内分噂ニ及候事、船宿分之吟味、先昨日切ニて、其節覆没之舟全ク覆りハ致不申、道具ハ船底ニ可有之見込ニ候へども、加勢之船夜分ニ数多取懸、此方人数ハ船を離候事ニ付、其中ニ不審之儀も有之候得共致方無之、先是切ニて指置可申と存、川西江参り相談、岡永江参候處、出勤に有之候ニ付、紙面残し置、金杉江参り、様子忤委敷承り、相待居候へハ、岡永、川西、東追々に参り候ニ付、右之咄とも仕、罷帰申候

三日 同

前日議定之事、且船宿江挨拶も可仕、為相談岡永、仲平宅江参候處、仲平同道ニ而御小屋江参り、礼金等申談候、右礼金遣候ニも及不申候得共、二日ハ船宿客も断候由ニ而、渡世を妨させ候上ハ徒ニも不被居、東、岡永、仲平、大一郎、自身ニて式百疋出し合遣申相談相決、嘉右衛門分遣候筈ニて彼手元江納候事、晩暮廣尾原ニて涼を取相別申候

御飛脚昨日着、平安、今日此元分差立候ニ付追々二三封相認、弥四郎手元江頼越申候事

四日 晴

五日 晴

清原小左衛門来ル、八ツ後近思録遠山宅ニ而會讀、夜分論語見合之事

註

① 清原小左衛門：御中小姓之御小姓役、御近習御次支配頭之支配、十五石五人扶持、内々十五石御足。御擬作取百石。(熊本藩侍帳集成、四四二、五五四頁)

六日 晴

七日 晴

朝飯後分入江傳左衛門所ニ而碁酒致、夕方内藤尉右衛門先代尉右衛門一周忌ニ付、案内有之候

五月十九日立之雇着、家書平安

八日 晴

東良助同道、愛日樓江参り候途中、古賀大一郎江逢申候ニ付約束仕置、夕方昆太仲江参候處、門前ニ而大一郎出逢、相尋候へハ太仲留守之由ニ付、近邊酒樓ニ而夜飲仕居候へハ太仲参り、夜九ツ時分引取申候ニ付、白金江帰候ハ八ツ七ツ之間と覚申候、先日之一件ニ付、太仲存寄も有之、今一手数仕筈ニ取極申候

九日 晴

一、今晚言行録會、暑中ニ付見合可申段、辛川方分紙面参候ニ付辛川方江参り、御稽古之御模様ども相伺候事

十日 晴

国友式衛門世話ニ而用刀手ニ入候事

上村彦次郎、今晚品川江着仕候段申来候

十一日 晴

愛宕下木挽町分辰ノ口江暑見舞ニ罷越、吉田閨之助方御小屋ニ而上村彦次郎面会

一、今日御飛脚着、先月十二日立之御便ニ而、家書平安

一、彦次郎噂ニて江島文雄、佐方角三郎塾長世話役御断、願之通御免被仰付候由

十二日 晴

十三日 晴

八ツ過久振強雨降出候

十四日 晴

友岡才右衛門辰ノ口分参候ニ付、入江氏、高田、松野、渡部、船津同道、高輪江参候事

一、今日出懸ケ外出願之節、辛川方分先日之咄ニ付、被申聞候筋有之候

註

① 友岡才右衛門：御歩頭。旧知二百石。(熊本藩侍帳集成、三五〇、四五九頁)

十五日 晴

御飛脚立、暑中見舞状数多仕出、昼後田中龍藏来ル、暮方小雨

十六日 晴陰、夕方小雨

御用御坐候段、清成方今申来候間罷出候へハ、孟子御會臨時被仰付、神農之言ノ章三節上ケ申候

一、佐藤武一來ル

一、去月廿二日立之御飛脚今朝着仕候由ニ而、家書高橋今届来、平安

十七日 晴、夜半過大雨

一、孟子 御讀、前章禹治水之節ニ至ル

一、赤羽有馬屋敷江參り、明日嘉右衛門御供立ニ付暇乞

一、吉田軍助、狩野太郎左衛門来ル

一、近思録、芳澤宅

十八日 雨、八ツ後大雨

一、有馬上総介様、今朝八ツ半時供揃ニ而御下国、岡永嘉右衛門御供仕候

十九日 雨

一、孟子 御讀、前章堯之為君節ニ至ル

一、志方司馬助、佐久間角助、林富之助、新美一左衛門着、東良助

来ル

① 林富之助：百石、御側御取次。（『熊本藩侍帳集成』、五七七頁）

② 新美一左衛門：新美久真太（一左衛門・貞平・又十郎）。御近習御目付御物頭列、百石。（川口恭子『細川家臣略系譜』熊本藩政史研究会、一九八三年十一月、『熊本藩侍帳集成』、五七七頁）

廿日 小雨

一、孟子 御會、前章畢

廿一日 晴

南郭先生忌辰ニ付而、服部新藏於少林院毎年當日詩會仕候間、遠山三左衛門同道、参会仕候、服部新藏、同道之助、同清五郎、其外藤井文崇、橋口不寧杯、凡七八輩参候

一、今晚言行録休会

一、片岡忠左衛門、明石常次着

註

① 南郭：服部南郭（一六八三～一七五九）。江戸中期の漢学者。荻生徂徠門下で詩文に長じ、『南郭集』は初編から四編まで計四十卷と広く読まれた。江戸赤羽に居住し、晩年諸侯の内で熊本細川侯の賢を喜びしばしば訪れたという。別号に赤羽先生。なお、南郭の孫服部仲山（一七三六～一八〇八、通称は真藏）以後の子孫は、代々南郭の赤羽橋の家に住んで家学を堅持し、また尼崎藩江戸邸に出仕して教え、明治維新を迎えた。仲山の妻直子は南郭の外孫である。（『江戸文人辞典』）

廿二日 朝晴、夕陰夜雨

一、孟子 御會、墨者夷之之章畢

一、八ツ後渡部直之允、池邊和門同道、高輪江參り、夜六ツ過歸舎

廿三日 朝晴、夕雨

一、加々山権内、芳澤金吾、田代、今井、中嶋、手前、御小屋二而

詩會、遠山縁家不幸ニ付不參

一、今日国策被遊

御讀候御様子にて、御本差出候様、国友式右衛門分申遣候事

廿四日 朝陰、夕雨

若殿様 御久振大崎御屋敷江被為入候、八ツ過 御歸殿

廿五日 同陰

一、孟子 御會、陳代間之一章

一、近思錄遠山宅、定性書畢

一、論語夜會、清成方泊りニ付休ミ

廿六日 陰

一、孟子 御會、景春之章畢

一、八ツ比渡邊魯助、税田正藏參候ニ付、同道東を尋、川西江參り

候へハ塩谷出會、川西家計之相談も有之候

一、今日 君上當御屋敷江被為入候事

廿七日 晴

一、孟子御會、周宵彭更之二章畢

一、先月上ケ置候 御詩題、御結撰被為濟、今日拜見被仰付候、序

文ハ島田忠次郎甲科、詩ハ田代雄次郎甲科

若殿様江ハ詩丙丁被遊 御取候、右跡御題之儀、権内休息仕候ニ

付、續ケ而差上候様被仰付候間、左之通書上申候事

紀謙信擊正景事 夏雨林莊圍棋 各體

但此節分紀事題一ツ宛加へ差上可申事

廿八日 夜雨

若殿様龍口御屋敷江御出

一、論語講釈去ル廿六日差支、今日仕候

廿九日 晴

一、孟子御會、萬章問宋小國也之一章畢ル

晦日 同

一、孟子御會、戴不勝公孫丑二章相濟

一、去ル廿五日朝分角奴癪を煩、一日越計ニ差動キ、今以不相替候

事、為加々山離杯、国友、上村、上野祐次同道高輪江參り、暮比婦

候

七月朔日 晴

一、若殿様 御登城、御帰り懸籠口江被為入、夕方 御帰殿之事

一、上彦次郎事二付為相談、安仲平江参り、仲平同道、塩谷門前二而別レ、木挽丁御屋敷江立寄り、上村、片山、名和江各面仕候事

一、夜分言行録休会之段、辛川分申来

二日 雨

一、孟子 御会、戴盈之之章分公都子章中二至ル

一、夜分清成方御小屋江参候事

三日 夕雨

一、若殿様御步行二而大崎御屋敷江御出被為在候

四日 晴

一、孟子、前章終二至ル

一、東良助来ル

一、去ル七日御国被差立候御飛脚今朝着、家書高橋分届来、平安

一、小太郎事二付而御内意之御状参り、次ニ尊答仕出可申答

一、丑三郎文武藝出精仕候二付而、五月廿一日銀式兩被下置段、頃、上妻半右衛門分達ニ相成候由、為知申越候

一、村上久太郎紙面参り、時習館御買上ニ相成可申由、浅井分頼ニ

相成居候書面之儀、此節休息中儒官衆之方江聞合申候處、浅井分相談ニ成、右之筋ニ而ハ無御坐候得共、撰戦実録ハ御買上ニ相成可申、右文故事ハ御用ニ無之候由ニ付、山代屋江返し可申事

五日 陰、小雨

一、加々山権内、国枝喜源太休息出立、御門迄相送候事

一、孟子御会、陳仲子之章畢ル

一、昼過被 召出、御詩作被為有、拜見 被仰付候

一、夜分論語会、清成方ニ而相勤

一、明六日分例之通講釈被 仰付段、清成方口達

六日 陰

一、講釈御常例之通、皋陶謨畢

一、論語会、夜分ニ致候事

七日 陰、九ツ時地震、夕雨

若殿様朝六ツ時御供揃ニ而御登城

一、文會、安井仲平受持ニて今日ニ約束仕置候二付、五ツ比分東良助を誘罷越候、来月ハ手元受持、比呂原茶屋を借り可申答

八日 冷、陰

一、孟子御會、離婁首章過半

九日 陰、夜雨

一、御用無之候二付、木挽丁上村彦次郎江参、入門等之儀相談、夫分塩谷甲蔵江参り、三助家計之事、弟量平江申置、猶上村同道ニ而名和を誘、神明前迄出申候、留守ニ東良助参候

一、夜分言行録、入江方ニ而會讀

註
① 量平：塩谷實山（一八一二～一八七四）。名は誠、字は誠之、号は實山・晚翠園・楠陰書屋。通称は量平、のち修輔。塩谷岩陰の弟。江戸後期明治初期の漢学者。天保十一年、浜松藩の儒官となる。文久元年、幕府は儒官として十五人扶持を給与。慶応二年甲府徴典館の学政となった。維新後は大学助教となる。明治七年九月十日没す。（『江戸文人辞典』）

一、孟子前章今次之章迄被為濟候
一、夜分論語會仕候

十日 朝強雨

一、孟子前章今次之章迄被為濟候
一、夜分論語會仕候

十一日 晴

一、孟子御會、三代之得天下今為政不難迄、四章被為濟候
一、今日御雇立申候二付、小太郎事返書差上申候

十二日 晴

一、孟子御會、小徳役大徳今不仁者可與言哉之章迄被為濟候
一、於御馬見御詩會、初秋對月、送人戌浦賀二題三首御作被為有候

十三日 晴

一、松崎江參り、上村彦次郎入門之儀申入、直二龍ノ口之様罷越、佐藤師江盆前之付届金子一封書中にて遣、帰り懸上村彦次郎、木

一、挽丁御小屋江罷越、羽澤入門之日取等申談候

一、大槻又八今晚病死之由二付、右田庄之助方江吊儀ニ參り申候

註
① 大槻又八：御番方、牧新五組、百石。（『熊本藩侍帳集成』、四三五頁）

② 右田庄之助：御小姓役、浜町御近習御次支配頭之支配、百石。（『熊本藩侍帳集成』、四三二頁）

十四日 晴

一、夕方吉澤金吾同道、御寺拜詣仕候

十五日 晴

一、東良助參り、来ル廿日出立之由噂仕候
一、松野七左衛門列涼歩にて物干江来り候

十六日 晴

一、太守様時候御一旦之御不例、最早御宜敷被為在候得とも、為御伺

若殿様辰ノ口江被為入候

一、前条二付例日講積被 差延候

一、夜分論語會仕候

一、奥田悦次郎忌明ニ而參り候

十七日 晴

一、今日御飛脚立ニ付相認、高橋方江五ツ御便ニ仕出申候、大里隼之助、稲津榮之助、元田傳之丞江仕出入、荻角兵衛方江注文之袖武鑑仕出入、村上久太郎返書仕出申候

一、孟子御會、為淵歐魚之全章被為濟候

一、上村彦次郎今日ハ羽澤江入塾可仕ニ付、昼比相見候間、同道致、田代雄次郎も同伴、松崎江参入門、入塾相濟、直ニ滯申候、田代同道七ツ前引取申候、今日ハ書冊整頓ニ而老翁取込之中ニ而、暫對話仕候、塩谷甲蔵も参り合せ候

一、今晚蒙求之 御會、王覽友弟迄相濟

註

① 元田傳之丞：元田永孚（一八一八—一八九一）。幕末・明治時代前期の儒学者、明治天皇の側近。幼名大吉、伝之丞、のち八右衛門と称す。字は子中、東野と号す。茶陽・東臯・猿岳樵翁の別号あり。十一歳にして藩校時習館に入り、天保八年、時習館居寮生となる。同十四年長岡監物・横井小楠・下津休也・荻角兵衛と会読を始める。安政五年、家督相続（五百五十石）。慶応三年十二月高瀬町奉行、翌閏四月用人兼奉行、七月中小姓頭となるも明治二年正月辞任する。同三年五月、藩主の侍読となる。明治四年一月藩命で上京、宣教使、少参事に任ず。五月三十日宮内省出仕侍読となり、同十九年五月宮中顧問官、二十一年五月枢密顧問官となる。明治二十四年一月二十二日七十四歳で没す。（『国史大辞典』）

② 羽澤：現在の東京都渋谷区、國學院大学付近にあった松崎懺堂の塾。

十八日 晴

一、今日ハ御會讀等御日課通り被遊旨被 仰出候段、御附役中ハ申来候

一、今日孟子御會、道在爾而求諸遠ハ善戦者服上刑迄被為濟候

一、田代雄次郎御小姓役被仰付候而ハ勤向繁多ニも有之、只今迄之通御會讀等ニ相出候ニ不及、今井武雄一度越ニ相出候様清成方ハ噂有之候由ニ而、當人於手元孟子御會迄ニハ無欠席罷出度存念、其上雄次郎出席仕候も御都合も宜敷御坐候段、辛川孫之丞昨日當番ニ而候間、其儀及噂候處、清成方江咄合、雄次郎孟子御會出席仕候様今日清成ハ被及噂候

一、東良助同道、高輪山口楼江離杯として参り、橋口彦助を迎、田中亮蔵、税田正蔵追々ニ参り合、夜分迄滯飲仕候、隣室ニ木村次郎左衛門方御次之面々餘計ニ引率ニ見へ候

今日佃花術有之候ニ付

若殿様為 御見物木挽町御屋敷江被為入候而五ツ過 御帰殿ニ相成、常例 御夜讀被為遊御休候

註

① 木村次郎左衛門：名は豊持、大監察となる。二千二百石。文久三年五月十七日没す。享年七十一。（『肥後人名辞書』、『熊本藩侍帳集成』）

十九日 晴

一、孟子御會、父子不責善章迄被為濟候

廿日 晴

一、御中暑之御氣味ニ而、御会御見合被 仰出候

一、東良助出立明日之筈ニ付、贈文二道并良助先人画像賛、旧稿五篇相携、暇乞ニ参候處、藩邸之方ニ引懸り、廿三日比出立可仕段申聞候

一、夜分渡部、田代物干ニ来り、佃烟火遙賞いたし候

廿一日 晴、昼比る時々小雨

一、昨日暮方ニ懸候而ハ 御熱も強被為在候處、今朝ハ殊之外被為遊 御解、全く 御中暑と相見奉恐悦候

一、御飛脚着、六月廿三日迄之家書相達、平安也、指替差上シ候由ニ而、小道具ハ不残包込手元江参り候へども、弥四郎手元江御飛脚番江相尋申候處、荷物江取り兼候而相断申候由、定指懸り相断申候而、出立之跡家内杯承知仕候と相見申候

一、出田十郎兵衛内用紙面一通、田中典儀方時候状一、城の弥三次状一、友成津内時候状并渡部直之丞方江之状各一、永田傳九郎一、堀内久左衛門着吹聴一、和久田三郎彦改名加兵衛、上村彦次郎江之状とも二各一、三村傳之助ハ一封相達候事

一、言行録会、清成方にて被相動候

註

① 田中典儀：二千石。佐敷御番頭。(熊本藩侍帳集成)

② 城の弥三次：城野弥三次。名は充通、字は礼卿、通称を弥三次といひ、静軒と号する。留守居、中小姓に拔擢される。明治六年八月没す。享年七十四。(肥後人名辞書)

廿二日 小雨

一、東良助明日日出立仕候ニ付、暇乞ニ来り候

一、去ル九日立之雇飛脚着、家書平安を報

一、松村十之允、田中典儀、福田角三郎、大城太郎右衛門、宇野市郎右衛門、出田十郎兵衛、永田傳九郎、堀内久左衛門書状、所々相達

一、小坂九郎助方相見へ碁戦仕候

註

① 松村十之允：松村十之進か。二百五十石、御鉄砲頭。(熊本藩侍帳集成)

② 大城太郎右衛門：百石。(熊本藩侍帳集成)、五五〇頁)

③ 宇野市郎右衛門：二百石。(熊本藩侍帳集成)、五四五頁)

廿三日 小雨

一、日本史本紀四十冊、論贊二冊、引用書目一冊、序一冊、目錄三冊一箱ニ入、小坂九郎助方江轉借仕置候

一、夜分国友式右衛門相見へ碁戦仕候

廿四日 晴、微陰

一、国友式右衛門、上村彦次郎来り、東良助ハ頼置候孟子字義疏證上村江相頼、羽澤江返申候

一、税田正藏来ル、河口加三太来り、来月朔日出立仕候由、借用之虚字類ノ書一冊直ニ返し申候

註

① 孟子字義疏證：戴震の著。

廿五日 晴陰

一、芳澤、遠山支二付、近思録延会

一、夜分論語会、清成方二而

廿六日 雨

一、論語会

廿七日 晴、冷

一、今朝迄二渡部方中庸卒業仕候

一、明日御飛脚立二付、家書并村上久太郎、田中典儀、和久田加兵衛、友成津内、出田十郎兵衛、各返書仕出

一、平川駿太状届来ル

註

① 平川駿太：名は清古、通称は駿太、韓水または垣翁と号する。百石。時習館訓導、獄曹などを経て侍読となる。明治十六年七月没する。享年六十八。（『肥後人名辞書』）

廿八日 晴、夜雨

一、御用人以下御中小姓役中迄御能懸り被仰付候儀二付、可申入儀有之、夜分清成方江参候

廿九日 晴

一、遠山三右衛門方二而詩会仕候

一、御能懸りの儀二付、澤村太兵衛方江出申候處、折節清成、入江相見へ候二付、御内意有之罷出候得共、詩会中之儀二付追而参上可仕段相断、引取申候

八月朔日 雨

一、御能懸りの儀二付澤村方江参り、及内話申候

一、謁有之候

二日 陰

三日 雨、冷、宜裕衣

一、孟子御會被為在候二付、急罷出候様申来罷出事、孰為大章今人之患在好為人師迄被為濟候

四日 雨

一、孟子御会、楽正子従子傲而之齊今為後為大迄二章被為濟候、今

日正解之儀被為有 御沙汰候

一、門岡員左衛門、今日着仕候

五日 陰

一、昼過 御会被 仰出、仁之實ノ章今此篇終り二至ル、昨日来御附役辛川方今内意有之、御中暑後尚又御食禁等被為在、御会毎今御刻限短く心持致候様との事二付、其通二仕候

一、四書正解御用ニ付取寄可申段、清成方ハ噲ニ成候事

一、近思録芳澤宅

一、論語会毎之通

註

① 四書正解：清の呉荃撰、三十冊。

六日 雨、時々晴

太守様當御屋敷江被為入候

一、論語會讀、例之通

七日 半晴

一、山城屋ハ正解持越候

八日 小雨

一、先月十六日立之飛脚昨日着、家書平安、中村加善母儀死去之為

知、荻角兵衛草稿受取之書状并白砂糖一箱送来、弥三郎江之一

封、水津熊太郎ハ之一封各到来

一、戸田仁兵衛ハ書状差越、浅井廉次詰之節買取ニ相成居候、撰戦

実録、時習館御買上ニ相成候間、世話致候様教授先生ハ被申聞、

欠本有無取調、欠無之ハ差下候様申来

一、柏木文右衛書状来ル

一、志方半之允隱居家督被仰下候而、半之允病死之段、小左衛門方

ハ為知来候

註

① 柏木文右衛：柏木文右衛門か。名は義質、文右衛門と称し、後

凋と号する。時習館助教、奉行副役、鉄砲頭などを勤める。百

石。明治元年六月八日没する。享年五十六。(『肥後人名辞書』)

② 志方半之允：百石。(『熊本藩侍帳集成』、五四八頁)

③ 小左衛門：志方小左衛門。旧知百石。(『熊本藩侍帳集成』、四六

九頁)

九日 雨
夜分中村健助方ニ而言行録会讀、酒後生暈

十日 朝雨強

御小屋論語会、並之通

十一日 晴

一、山代屋ハ指出候四書正解、御次江差出置申候代金、壹両壹朱

一、灸治ニ外出仕、夕方木村十左衛門方江參、弓を習申候

一、暮比ハ明石常次、片岡忠左衛門同道、近邊歩行

十二日 晴

一、留守支配代判之儀、高橋弥四郎江頼置候處、弥四郎出府ニ付而

ハ誰ニ而も頼置申答ニ而、此節弥四郎相談之上、水津熊太郎江頼

越置申候代聞、平塚孫四郎方江も其趣申遣答、明日御雇立ニ付、

水津并留守江右之趣申遣候

註

- ① 平塚孫四郎：百五十石。御作事所御目附、御掃除方御目附兼帯。
〔熊本藩侍帳集成〕、五七八頁〕

十三日 晴

一、今日ハ辰ノ口御屋敷ニ而御能御坐候ニ付拜見ニ罷越候、遠坂関内方杯阿漕、鉢木等被相動候

一、御母様御染葉并家内注文之品三袋今日買取、明日之御飛脚ニ高橋方迄頼置申候、先日水津ノ世話差上呉候指替、高橋御小屋江参り、右ニ付留守ニ而候へども持帰申候

註

- ① 遠坂関内：名は萬助、通称は関内。小姓頭。千石。〔熊本藩侍帳集成〕、四五九頁〕

十四日 晴

一、明日御飛脚立ニ付、中村加善、志方小左衛門各吊儀状、柏木文左衛門返事、荻角兵衛右同、水津熊太郎右同、留守江之一封仕出申候

一、竹村弥右衛門先日着ニ付、菊池ノ之封物相届、尊書、丑三郎、徳太郎書并鮒到来、今日直ニ直ニ返書仕上、丑三郎江も仕出申候

註

- ① 丑三郎：木下丑三郎。木下鞆村の次弟。家督を相続する。慶応四年二月二十六日没す。
② 徳太郎：木下徳太郎。初名は助之允、名は雅隆と称し、徳太郎と改め、また助之とする。木下鞆村の弟で初太郎国均の嗣子と

なる。玉名郡内田郷総庄屋となり、肥前唐津藩に招聘され藩政

改革に参画、維新後は熊本に戻り玉名郡長となり、県会議員、衆議院議員となる。明治三十一年十二月八日没す。享年七十八。

〔肥後人名辞書〕

十五日 晴、夜二人雨

若殿様御不例後、未夕御登城不被遊候

一、上村彦次郎相見へ申候

一、近思録、遠山宅ニ罷勤申候

一、清成風邪ニ付今晚會置候事

一、門岡員左衛門祭を致候ニ付、明石常次同道、御小屋江参り申候

十六日 雨

一、今日例之通講釈被仰付候、益禊首二章上ケ申候

一、村田玄珉相見へ、倅俊哲事頼ニ成申候

十七日 雨

一、今日文社、廣尾原ニ而致し、渡部魯助列ノ受持申候、出席、安井仲平、古畑文蔵、上村彦次郎、渡部魯助、長尾乙次郎、税田正蔵、竹居清記、橋口彦助、自身都合九人、自分年号議、地獄変相

二篇并送良助序一篇、先度分共二三篇相綴申候

一、次之会古畑受持ニて深川同人之宅ニ而致可申、題ハ

生民已来未有孔子論 屯庵記 紀事

註

① 古畑文藏：石合江村（一八一八—一八七三）。名は文之、字は子礼、号は江村、のち黙翁、通称は文藏・嘉太郎。江戸後期から明治初期の漢学者。初姓田口氏。江戸深川で生まれた。十歳で古畑玉函について学び、古畑姓を名乗る。嘉永安政の間は石合氏を名乗る。明治元年、下野壬生侯が招聘し、藩政の改革に当たらせ米百俵を贈った。維新後は本所に学舎を開いて教授した。明治六年一月十七日没す。享年五十六。（『江戸文人辞典』）

十八日 雨

一、隈部彦四郎休息出立ニ付見立申候處、御会被 仰出候ニ付直ニ罷出、離婁下篇首二章上ケ申候

十九日 晴

一、山田守敬一封、吉^吉宇兵衛と申仁今届来ル、右書中城の、筑紫注文ものにて金子も有之候

一、孟子御会被 仰出、離婁下篇、孟子告齊宣王乃章今君仁莫不仁之章迄被為濟候

一、御会后、田代雄次郎同道、本挽丁片山喜三郎見舞

廿日 陰

一、所持之書籍小口書仕候、田代加勢

一、夕方 御会被 仰出、言人之不善章迄被為濟候

一、昨日留守ニ塩谷甲蔵参り、川西事ニ付内用之書面残置候

廿一日 晴

夕方御會被 仰出、至大人不失志子之心

廿二日 晴

昼前 御會被 仰出、至 博学而詳説之

今日夕方大森江 御遠乗被為有候

一、安井仲平、渡部魯助来り、橋口彦助江豚を屠ニ参り可申、同道仕罷越候處、彦助鎌倉江赴候ニ付、高輪御屋敷立出候處、

若殿様御遠乗ニ奉行合、夫今七間江参り、赤羽迄仲平を送り、夜五ツ過罷帰申候、醉態ニ及申候

廿三日 陰

一、御用人中今被申達御儀御坐候由ニ付、詰問江罷出候様申来候ニ付罷出候處、明日池上方角被可遊 御出ニ付被召連旨、被申聞候

廿四日 晴

今朝五ツ半時御供揃ニ而 御歩行ニ而被遊 御出、中延八幡宮御小

立ニ而、昼比本門寺江御着、於門前 御昼被遊 御帰、八景坂江御通行、品川筋江被遊 御出、七ツ半比被遊 御帰座候、御往来之内

御詩作二首、御聯句弍首、自分四首差上申候、御近習御次御供木村次郎左衛門、清成八十郎、志方司馬助、中村健助、佐久間角助、

松野七左衛門、田代雄次郎、林富之助、中沼十郎助、北川藤作、内藤尉右衛門、新美一左衛門、深水宗古、今井武雄、嶋田忠次郎、河

部小才次、金澤邊、自身、御帰殿之上頂戴之御禮申上、引取申候事

註

① 中延八幡宮：現在の品川区旗の台三丁目、中延八幡宮法蓮寺。

(『江戸名所図絵』)

② 本門寺：大田区池上にある日蓮宗の大本山。山号は長栄山。開

基は池上宗仲・宗長。開山は日蓮。創立は文永十一年(一二七

四)。(『日本国語大辞典』)

③ 八景坂：八景坂は、薬研坂、やげん坂と唱える。もとはヤケイ

ザカと呼んだ。現在のJR大森駅西口前の通りを南東に下る。

(『江戸名所図絵』)

④ 金澤邊：二百石、江戸詰御奉行触。(『熊本藩侍帳集成』、五八五

頁)

廿五日 晴

一、近思録、遠山差支ニ付延會申談被成候事

一、夕方 御会被仰出、

至聲聞過情君子恥之

御立後昨日 御途中之 御作書等添削被 仰付、差上申候

一、夜分清成方論語會

廿六日 晴

一、六ノ日講釈已来定例ニ相心得候様、御附中今申来候

一、今日講釈、益稷否則威之迄ニ至ル

一、夜分論語會仕候

廿七日 晴

一、明日御飛脚立ニ付、戸田仁兵衛ノ頼来候撰戦実録箱入ニ致、御

役所御物書中村類蔵江懸合直ニ差出、仕出方仕候

右書代金式分式朱ニ付、書林書附追而仁兵衛、手元江替可申

筈、尤吉田江為任、一兩為替ニて差越來、右ノ取計可申、右

之趣ハ書中仁兵衛ニ申越候

一、田代禎三郎元借仕候ニ付、案内御坐候ニ付、夜分參候

廿八日 晴

今日御飛脚立ニ付家書其外、平塚孫四郎、加々山権内、木下勘右衛

門父子江仕出

一、夕方 御會被 仰出、周公待旦之章ニ至ル

一、夜分久保庄助列同道、芳澤宅江參り申候

廿九日 晴

一、聖護院宮様御下向、道中之行装為 御見物

若殿様田町御屋敷江被為入、夫今大崎江御遠乗被為遊候事、右

宮様御通行為拜觀、永松宮門同道、山口屋江參候事

一、夜分於芳澤宅詩會仕候事

註

① 聖護院宮：嘉言親王(一二八二—一八六八)。邦家親王の王子。

天保二年聖護院の盈仁入道親王の弟子、光格天皇の養子となる。

翌年親王となり、得度、のち聖護院門跡。慶応四年還俗して、

内国事務総督、海軍総督などをつとめた。幼称は魏宮。法名は

雄仁。(『日本人名大辞典』)

② 永松宮門：御蔵米百石。(『熊本藩侍帳集成』、五七一頁)

晦日 晴

一、夕方 御會被 仰出、子濯孺子之章、迄被為濟候

九月朔日 雨

嗣君御登城

一、細川渡殿東橋之栖居江為見舞罷越申候處、途中二而雨二成、罷越候へハ、今日佐渡殿、能登守様江御案内二付、渡殿彼方江被參、御留主二付附役之者迄申置引取申候、然處上村彦次郎、慊堂之用向二而東橋江罷越、直二鉄砲洲之様罷越候二付、同道家来を相借、四日市分別れ辰ノ口御屋敷江罷出、高輪留守二付高本慶太郎御小屋江參り、夜二入罷り帰申候

註

① 能登守：跡部良弼。江戸時代後期の幕臣。山城守、のち能登守、甲斐守、遠江守。唐津藩主水野忠光の五男で、忠邦の弟。旗本跡部氏を継ぐ。天保七年四月二十四日、堺奉行より転じて大坂東町奉行となる。天保十年九月十日大目付、つづいて勘定奉行、江戸町奉行などを歴任、明治元年二月二十六日若年寄となり同三月三日辞任。同十二月二十日没す。(『国史大辞典』)

二日 晴、午後雨

一、御會被仰出、君子有修身之憂迄相濟

一、午後 御詩会表 御居間二而被遊候

山驛曉發 題赤壁図

三首被為 御作候

三日 晴

一、今日大森方角 御遠乗二付御休会

四日 晴

一、御會被仰出、至匡章之章

一、午後高橋弥四郎見へ候而、金子清八、益田市之允參り、夜二入散候事

一、先月廿八日立之御国飛脚今日着、家書平安、奥村四郎作、築瀬驛兵衛書状来ル

註

① 奥村四郎作：百八十石(旧百五十石)。(『熊本藩侍帳集成』、五四四頁)

② 築瀬驛兵衛：名は友房、驛兵衛と称し、後驛平次と改める。また徳翁と号す。二百五十石。時習館訓導より助教となる。明治五年四月十日没す。享年六十六。(『肥後人名辞書』)

五日 雨

一、御會被仰出、離婁之篇畢ル

一、御會後、国友式衛門、田代雄次郎同道、大崎江茸取二罷越、夜分式衛門方二而咄申候事

六日 晴

講釈例之通、至丹朱傲之章

一、今日

太守様當御屋敷江被為入候

一、川西確助家計之事ニ付塩谷甲藏江罷越、甲藏同藩今三兩之借金、甲藏両人名前ニ而借可申相談仕候

一、夜分論語會、雍也篇畢ル

一、去ル三日 御課題之詩文卷拜見被 仰付、四日ニ指上申候、紀事ハ国友式右衛門甲科、詩ハ

御前甲科、跡之御題

一 谷懷古 題楓橋夜泊圖、紀事ハ蘭丸、信長を評事を上申候

一、尊長家族願一昨年御達之通之處、服部方、右田方取寄之儀有之、昨年七月自身御国元出立前、尚再内意之書附被達置候由之處、弥以程被付旨御奉行衆今御達ニ相成候由ニ而、松井方列今其趣を以内意書附返却ニ相成、右之通ニハ候へども、内意ニも被及候末之儀ニ付、為心得書附、且松井方列今之御達も今日差越ニ相成候

七日 陰

昨夜服部列今之返達、今朝御請仕出、別紙等返上仕候

一、御會被 仰出、萬章篇首一章被為濟候、今日今注文共ニ被遊

御説候様ニ上ケ申候

一、御作文譯文等ニ御便利之書吟味仕候而、差上候様 御直ニ被仰

付候

八日 雨

一、御會第二章ニ至

一、昼後今打立、辰ノ口江罷越、境野方始、両組脇江先日通達之礼を相述候、高橋江罷越、夜ニ入帰申候

九日 朝陰雨

嗣君御登城、並居御礼申上候

一、昼比今芳澤宅ニ而棋を圍申候

十日

今日今御會等御日課通被遊旨被 仰出候段、御附中申来候

一、御會、封象之章被為濟候

一、御夜讀之處、御所様江被為上候ニ付引取候様との事ニ候

一、論語會仕候

十一日 晴

嗣君五ツ時御供揃ニ而、荻窪御遠乗被遊候

一、右大将様大森方角 御成

一、遊学生講釈可被 仰付御模様ニ付、名和桂之助今内意申越候間、上村彦次郎江相知せ申候、且又後藤善右衛門方松崎懺堂江參

申度由ニ付、其段懺堂江相通置、各兩条一同昨日人遣申候處、懺

堂引取を望来ニ付、今日後藤方江其段申遣候事

一、御直ニ被 仰付置候書物之儀、雜事類編譯文須知岡田屋引取寄
候中至極之物ニ付、右二部昨日差出申候事

註

① 右大将：江戸幕府第十二代將軍、徳川家慶（一七九三～一八五三）。

② 譯文須知：松本愚山（一七五五～一八三四）解詁、全五卷。

十二日 晴、微陰

一、御會、盛徳之士君不得而臣章畢

一、夕方 御詩會、御三階江被為入候、今朝御會之時分、昨日御遠

乗向ニ而被遊候、御作二首拜見被 仰付、十二僧村之御趣向も被

為有候御沙汰ニ付、今夕之御題一ツハ過十二祠、一ツハ撰送對州

侯還国ヲ上ケ申候、各一首宛被為在 御作候

一、夜分御軍書ニ候へども、蒙求被為遊候

十三日 雨

一、御夜會之處、佐渡殿出立追々ニ付

御所様江被為召、

若殿様も被為上候ニ付、今晚御休会被 仰出候

十四日 晴

一、今日御飛脚立ニ付、書状仕出

一、御會、堯以天下与舜有諸之章畢ル

一、上村彦次郎見へ候ニ付、夕方分門岡員左衛門同道、古河端步行

仕候

一、論語會之儀

朔日 七日夕 十一日夕 十四日夜 廿一日夕 廿七日夕

右之通相改、今晚仕候事

註

① 古河：古川。新宿区・渋谷区・港区を流れる東京都の二級河川。

新堀川・赤羽川・金杉川ともいう。江戸時代渋谷村に多くかか

るため上流は渋谷川と唱えた。現在では港区南麻布四丁目・渋谷区恵比寿二丁目を境に上流を渋谷川、下流を古川としている。

（『日本歴史地名大系』）

十五日 晴夜小雨

嗣君 御登城

一、先月十三日立之飛脚着、家書平安、宇野市郎衛門、友成津内、

田中弥兵衛書状来ル

註

① 宇野市郎衛門：宇野市郎右衛門か。二百石、御奉行副役。（『熊

本藩侍帳集成』、五七五頁）

十六日 晴

一、講釈例之通、益稷今日相濟申候

一、田代雄次郎、佐藤一齋江入門仕候ニ付、今日同道仕候、帰り懸

古賀大一郎江尋申候處、穀堂追善之由ニ而、侗庵先生其外、川

北、昌谷、野田、井上杯参合候ニ付、返り候様申候間、雄次郎上

下を借り罷通り、夜四ツ過御屋敷江帰着仕候

一、今晚 御夜讀之儀ハ御附中迄御断申上候

註

① 穀堂追善：九月十六日は、古賀穀堂（一七七七～一八三六）の命日にあたる。

② 侗庵：古賀侗庵（一七八八～一八四七）。名は煜、字は季暉、号は侗庵・蝮屈居・古心堂、通称は小太郎。江戸後期の漢学者。古賀精里の第三子。古賀穀堂の弟。佐賀に生まれ父に教えを受けた。文化六年幕府の儒者見習いとなり、昌平黌に出仕して米二百俵を給せられ、天保十二年には布衣を許され百俵を増俸された。弘化四年正月三十日没す。（『江戸文人辞典』）

十七日 雨

一、今日例之通外向文会ニ付、記一篇相認古畑江参可申存居、橋口江懸合候へハ無據差支参り得不申、安井江傳言紙面も参候、然處高橋ハ御便状ニ申越、養子事ニ付内談仕度参り呉候様との事ニ付、古畑迄罷越其段相断、深川集會之所江ハ参り得不申候、夫ハ龍ノ口江参り暮比ハ引取申候

一、今日雨天ニ付而ハ

御会江被為立ニ付、御夜分ニ懸御附衆江相伺奉願、御近習中国友、手元江相談相頼罷越申候處、

御会ハ不被遊、戦国策被為游御讀候ニ而、此間上置候句讀□□残りなく相成候ニ付、句讀濟次第譯を差出候様御近習當番ハ申来候一、今日ハ火之御番、御人数揃之筈ニ御坐候處、雨天ニ付御見合ニ成申候

十八日 晴

一、昼後、羽澤江人を遣、魯助、彦次郎不在ニ付、璞甫返事、慊堂手紙も参候事

一、新美一左衛門御目附本役被 仰付候

註

① 璞甫：山井介堂（一八二二～一八六二）。名は璞輔、号は介堂。江戸後期の漢学者。本姓渡辺氏。渡辺樵山の弟。松崎慊堂没後、代わって伊予西条藩の儒員となり、督学として藩士子弟の教育にあたった。また弘化三年から麻布永坂町で塾を開いて教えた。文久二年三月十日没す。（『江戸文人辞典』）

十九日 晴

一、芳澤金吾、田代雄次郎、野村一衛、田代綴三郎、中嶋朝之助、深水橋齋同道、新田玉川江参、夜ニ入帰候事

廿日 雨

安井仲平参り、橋口彦助江同伴、豚を煮申候、夜九ツ比帰邸

今日於龍口御人数揃有之

世子君被為入

御名代被為 召候

廿一日 晴

一、御會、舜禹益之章被為濟候

一、夕方、論語會仕候

一、夜分、入江方ニ而言行録會仕候

廿二日 晴

一、今日 御拝領之鷹御披ニ付御會不被遊段、御附中申來候

一、長岡佐渡殿出立、朝之内暇乞ニ罷越候、右ニ付慊堂當御小屋迄参り、四ツ比今品川筋同道、渡殿も被見、一同品川中小立迄参り見立申候

廿三日 晴

一、昼過今松平主殿頭様下屋敷ニ小賀様御出ニ付参候様、朝之内、川北喜右衛門参候ニ付、田代雄次郎同道、参會仕候、上田善右衛門、澤三郎、古賀大一郎、野田希逸其外、柳澤太郎、佐久間何某、薩州河添何某参り、夕方引取申候

一、夜分、蒙求御會被仰付候事

註

① 松平主殿頭：松平忠誠（一八二四～一八四七）。文政七年一月十七日生まれ。松平忠侯の次男。天保十一年肥前島原藩藩主松平（深溝）家第二次四代となる。弘化四年四月十六日没す。享年二十四。通称は又八郎。（『日本人名大辞典』）

② 澤三郎：沢熊山（一八五五）。名は徴、字は子慎、号は熊山、通称は三郎。江戸後期の漢学者。伊予の人。伊勢神戸藩（本多氏一万五千石）の江戸学問所進徳堂の教官として江戸で仕えた。安政二年七月十五日没す。（『江戸文人辞典』）

③ 柳澤太郎：柳沢芝陵（一八一六～一八四五）。名は信兆、字は伯民、号は芝陵、通称は三郎。江戸後期の漢学者。肥前島原藩

（松平氏七万石）の世臣で、江戸邸留守居役柳沢信行の長男。若くして藩主に仕え近侍となった。川北温山の勧めで海鷗文社に入り、ついで佐藤一斎に請い昌平黌に入った。やがて帰藩して藩校稽古館の教官となった。弘化二年八月五日没す。享年三十。（『江戸文人辞典』）

廿四日 晴、夜雨

一、孟子御會、伊尹以割烹要湯章半ニ至

今日、柳生様御代見参、被為遊

御稽古候、夕方、喜多六平太出申候而、御稽有御坐候、此間御謠御稽古初候今日、初而六平太出申候

一、御所様被為有 御頂戴候ニ付、御夜讀不被為遊候事

一、村上久太郎、和田彦左衛門一同、今晚品川迄着之由承候ニ付、夜分ニ駿河屋江参、對面仕候

註

① 和田彦左衛門：百石、御次。（『熊本藩侍帳集成』、三五頁）

廿五日 雨

一、小坂九郎助今日此元出立、帰国ニ成候ニ付、御門迄送り申候、村上久太郎五ッ過着

一、近思録、遠山支ニ付見合候事

一、夜分久太郎方江参候

廿六日 晴

一、講釈例之通被 仰付、禹貢揚州迄相濟候

一、御夜讀ニ罷出申候

一、

廿七日 晴

一、御會、前章畢

一、論語會讀仕候

廿八日 雨

一、御會、孔子於衛之章終

一、昼後、深水橋齋、安積祐助方江同道仕候、帰り懸赤羽ニ而木村

庄三郎、片山喜三郎ニ對面、庄三郎近日中帰国仕候由

註

① 安積祐助：安積良斎（一七九〇～一八六〇）。名は重信・信、字

は思順・子明、号は良斎・見山楼、通称は祐助。江戸後期の漢学者。父は陸奥国安積郡山八幡の神官安藤筑前親重。文化十一年神田駿河台に卜居して書生を教えた。天保七年二本松藩儒（丹羽氏十萬石）となり、同十四年藩校敬学館の教授となった。嘉永三年幕府儒官となり、外国書翰和解御用などを務めた。万延元年十一月二十一日没す。享年七十一。（『江戸文人辞典』）

廿九日 晴

一、御飛脚被差立候ニ付、仕出申候

一、村上久太郎が荻角兵衛書状持上り候、明石常次が池松大八紙面封中ニ、永屋猪兵衛、友成津内両封有之候○九月十三日

立之御雇昨々日着仕、平安、栃原五郎助訓導助勤當分被仰付

候段、高橋が為知ニ相成申候○今日御飛脚ニ荻角兵衛江之返

事、友成津内、永屋猪兵衛、田中弥兵衛、上村千三、築瀬騏

兵衛、池松大八各返事仕出也○築瀬方江八山城屋頼ミ之板下

之事、浅井方跡目ニ懸合之儀頼越

○戸田仁兵衛江撰戦実録受取、差越

○筑紫馬江注文之下ケ緒相調下候

○山田守敬江返書

○高宮大玄親跡目被仰付、御目見医師被仰付候、歛申遣

明後二日片山喜三郎江講釈可被 仰付ニ付、孟子中

御擇之ケ處、三ヶ所拜見被 仰付、其中尚思食を奉伺候處、膝文之

首章被遊

御沙汰ニ付、至極之段申上候

註

① 永屋猪兵衛：名は昌知、通称猪兵衛、後伊平と改め、雲洞と号す。藩に仕え世禄二百石、奉行、用人を兼ねる。明治十七年七月没す。享年六十八。（『肥後人名辞書』）

② 栃原五郎助：名は矯、字は伯立、五郎助と称し、漆潭と号す。菊池郡出身。江戸遊学後時習館訓導となる。また中小姓となる。嘉永二年九月没す。享年五十二。（『肥後人名辞書』）

十月朔日 晴

嗣君御登城

一、八月廿六日立之飛脚着、家書平安

一、夜分言行録会業、清成

二日 晴

一、片山喜三郎江講釈被仰付候

一、御詩會、御三階二而被遊、題加藤浄池公画像、園池垂釣二題上申候、三首被為在御作候

一、夜分御軍書罷出候處、

御所様江被為上、御休讀被 仰出候

三日 晴

一、川西家事二付塩谷甲蔵江參候處、不在二付、木挽丁片山喜三郎を尋、夫ハ龍ノ口江罷越、佐藤講席江參り、尚又龍ノ口高橋江參り、高瀬市助同道、罷帰申候

一、村上ハ名和傳言、御題之事申聞候

四日 晴

一、追而來春御入部之評判仕候處、昨日小坂氏休息被仰付候二付、

一統相止申候

一、御會、百里實之章相濟、萬章上篇相濟申候

一、伊達大膳大夫様ハ御所望之由二而、休兵久而國益困と申 御題を被仰出候二付、名和ハ紙面を遣申候

一、今晚御夜讀御休之事

註

① 伊達大膳大夫：伊達宗城（一八一八～一八九二）。幕末期の伊予

国守和島藩の藩主。先代宗紀の従弟にあたる旗本山口相模守直勝の次男で、幼名亀三郎。いったん一門の伊達寿光の養子となつた後、文政十二年宗紀の養嗣子となり、宗城と称し、兵五郎と改名。字を子藩。天保六年元服、五月に初入国。弘化元年、退隠した宗紀の跡を嗣ぎ、遠江守、同三年侍従に任ぜられる。安政五年十一月に退隠、伊予守と改める。王政復古後、維新政府の議定となる。明治二十五年十二月二十日東京浅草今戸邸で没。七十五歳。雅号南洲、藍山公と諡る。（『国史大辞典』）

五日 晴

一、嗣君染井村御遠乗

一、夜分論語會、清成方二而例之通

六日 晴

一、講釈例之通、禹貢荊州ハ導山之節迄申上候

昨日 御遠乗先之 御作拝見被 仰付候

一、嗣君林家御入門之儀

太守様ハ被 仰出候段、御内意清成方申聞二相成、内輪聞繕等致候様との事二付、自身林家御直門願可仕心組之段も申向置候

一、御題之儀二付、名和桂之助參候

一、夜分御讀物罷出候

七日 晴

一、御會萬章下篇首章三節被為濟候

一、今日玄猪御祝ニ而御夜會御休之事
 一、夕方論語會仕候、八ツ前橋口彦助を尋申候

八日 晴、夜陰

一、御會前章相濟、鬱録之章三節被為濟候

一、昼後有馬邸ニ野崎平八を尋、上総介様林家御招之諸式承り合候

一、林家江罷越、諸藩林家入社之様子承り合、且自身林家入門頼込申候、束修之儀左之通

一、金式百疋 林大学頭様

御肴代と記申候

熨斗目録付、目録ハ奉書ニ而有之候

尤白木臺も付、下ケ札仕候

一、同百疋 員長川田八之助

但封之上ニ熨斗付、御扇子代と記申候

一、同百疋 御家老嶋村丈助

同

一、同式朱 御用人内田聞多

一、同式朱 同 前原運平

一、同式朱 同 西尾喜左衛門

一、同式朱 同 山田隼太

各何レも封様同前之事

一、夜分御軍書ニ出申候
 註

① 川田八之助：河田迪齋（一八〇六～一八五九）。名は興、字は猶

興、号は屏淑・藻海、のち迪齋。高松藩士河田忠之の第三子。文政八年江戸に出て尾藤二洲に学ぶ。佐藤一斎にも学び、一斎の八女と結婚し養子となった。一斎が幕府の儒員となると、その旧居で林家の都講として教授した。安政二年昌平黌の儒官となり、禄米二百俵と十五人扶持を給与され、大番の上席に列した。安政六年一月十七日没す。（『江戸文人辞典』）

② 林大学頭：林禮宇（一七九二～一八四六）。名は號、字は用賴、号は禮宇・摘齋・培齋・筠亭、通称は號藏、のち又三郎。八代大学頭林述齋の第三子。文政二年には学職につき三百俵給与、布衣を許される。同十二年には叙爵して左近将監を名乗った。天保九年大学頭となり、家斉及び家慶の侍講となった。小姓組番頭につき禄も二千俵となる。弘化三年十二月六日没す。（『江戸文人辞典』）

九日 雨

一、夜分言行録、辛川方御小屋

十日 晴

一、御灸治ニ付御會休、夜分御同前二候

高田、長沼列同道、鮫洲江罷越候

十一日 晴

一、御會前章分問友之章三節被為濟候

一、夕方論語會仕候、前月差上候御課題之御詩拝見被仰付候

十二日 晴

一、朝之内、御詩卷拜見、差上申候、文国友甲科、詩二題共二
御前甲科、跡御題、紀志賀親次事經関原有感減礙、當月中限差上
候

一、御會前章分交際之章三節被為濟候

一、夕御三階二而 御詩會 思召二而晴陽園賞楓画鷹を上、三首被
為游候事

一、御夜讀、並之通被遊候事

註

① 志賀親次：生没年不詳。安土桃山・江戸時代前期の武将。大友氏一族の志賀氏の一流北志賀氏の当主。キリシタン。永禄九年（一五六六）または十年生まれ。志賀親度の子。豊後岡城を本拠とした。文禄二年大友義統に従つて朝鮮へ出兵、義統が同年改易されると急ぎ帰国。慶長元年秀吉から豊後国日田郡大井荘で千石をうけ、同六年福島正則家人となつて安芸・備後で千石。翌年九月には小早川秀詮（秀秋）に美作・備前で九百五十石を与えられる。同年秀詮死亡、小早川氏断絶後の行動は不明。子孫は肥後細川家につかえた。（『国史大辞典』）

十三日 晴

一、久留米邸江平八を尋、直二林家江罷越、八之助江對面仕、問合
之一件委敷咄合、書附等取申候、夫分龍ノ口江参り、山崎を尋、
高田分直二帰申候、先月十三日仕出之御国状昨日着、宿本分の小
袖受取、罷帰候
一、御夜會並之通

十四日 晴

一、御會前章終

一、川田八之助江問合之書附共、組脇中江差出

一、夜分論語會仕候

十五日 晴

一、川西三助留守江金子三兩借申候、根元三助高利之金子を借り
居、立行六ヶ敷候二付、甲蔵相談外向二而種々心配仕候得共、出
来致不申候間、手元分振替、三助留守二ハ脇方分借り渡候と申、
月二壹朱之利、外二壹朱之減之取組と申而、甲蔵中入を話仕、三
月七日十日暮四度之渡り方之時、毎度壹分式朱宛相納可申筈二約
束仕候、右金子為持遣申候、尤去亥ハ他分借り渡候而ハ無之、手
元之用金二候へハ、歩ハとり不申、月式朱當之月賦二仕可申、元
高丈ケ拂込候處二而、根切之段申問候筈、是儀ハ甲蔵江も未夕明
し不申候

十六日 晴

一、朝七ツ過分御門出、林大学頭様江御門入仕候、今日長州分二人
同様入門仕候

一、夜分 御軍書之後二史記刺客傳を上申候

十七日 晴

一、若殿様御家中文藝被為 御覽候二付、昼迄拜聴二罷出候

一、文社、渡部魯助、税田正藏、古畑文藏、上村彦次郎、竹居清
記、田中亮藏參會

後席安井宅、課題

趙普論

題二十四孝図後

寧靜堂記

一、御題之事二付名和桂之助參候

十八日 晴

若殿様羽田方御遠乗二付、御延會、夜分も御同様之事

十九日 雨

一、文藝 御覽終日罷出候

一、夜分不時二 御會被仰出、仕非為貧之章被為濟候

廿日 晴

一、御會君子之不託諸侯章被為濟候

一、昼後

召レ候而席書被仰付候

一、御夜讀、今晚吳越軍談相濟申候

廿一日 晴、暮小雨

一、御會、不見諸侯何義章終

一、午後川北温山江尋、同藩佐久間喜一郎宅海鷗社集、澤三郎、荻
生惣左衛門、昌谷五郎、白井龍ノ助、柳澤太郎、大洞納藏、龍崎
某、嶋田勘衛門出會、後會大洞受持、素軒記兼題

註

① 昌谷五郎：昌谷精溪（一七九二～一八五八）江戸時代後期の儒
者。郷里備中の伊達北山、筑前の亀井南冥にまなぶ。のち江戸
で佐藤一斎や林述斎に師事し、昌平黌にすすむ。文政七年美作
津山藩儒となり、文武稽古場開設につとめた。安政五年八月二
十七日没す。享年六十七。本姓は原田。名は碩。字は子儼。通
称は五郎。別号に無二三道人、寄々園主人。著作に「周易音訓
書」など。（『日本人名大辞典』）

② 海鷗社：文政年間から江戸にあった文社の名。広瀬蒙斎、古賀
穀堂が盟主となり、毎月十七日会した。社友には他に斎藤拙堂、
川北温山、安積良斎などがあり、弘化元年の書画集覧からも、
当時存続していたことがわかる。（近藤春雄『日本漢文学大辞
典』明治書院、昭和六十年）

廿二日 晴

一、諦了院様七回御忌御法事、明日迄

一、今日御會之所、清成噂二付祭儀三四節上ケ申候

一、七ツ過緒方列同道、妙解院參拜仕候

註

① 諦了院：細川齊茲（一七五五～一八三五）。宝暦五年四月二十六
日生まれ。肥後宇土藩主細川興文の子。明和九年宇土藩主細川
家六代となる。細川治年の養子となり、天明七年同藩主細川家
八代。立礼を齊茲と改名した。天保六年十月二十三日没す。享
年八十一。諦了院は戒名。（『日本人名大辞典』）

廿三日 晴

嗣君今日 御登城

卅日

今日迄も腫物散り不申候二付、引入達仕候

〔以上、二卷終〕

廿四日 晴

御會、萬章下篇被為濟候

御夜讀、今夜今三國志被遊候

廿五日 晴

旧里社日二付、入江列招キ申候、今日今頭ニ腫物出来申候

廿六日 晴

今日講釈ニ罷出候處、少々

御異例被為有候二付、御延引被 仰出候

一、安井仲平来ル

廿七日

今日迄ハ御會も不被遊候二付、腫物療治仕候

廿八日

射術 御覽

廿九日

今日御飛脚立二付、諸状仕出申候